

## 寺村先生の思い出

アンドレイ・ベケシュ

寺村先生が亡くなったことを知ったのは、まだ母国のユーゴにいたころです。ある朝はやく筑波大学の友人が突然の電話で知らせてきたのです。朝の眠りから、寺村先生がもういない世界へのつらい目覚めでした。

寺村先生が体が弱いことは知っていましたが、まだわたしの父よりも若くて、亡くなるなどとはみじんも考えていませんでした。生まれたばかりの赤ちゃんの子育てに励んでいるうち、今年の正月は年賀状も出さずじまい、せめて中国の正月にだそうかなと思っていたら、ついにそれも間に合いませんでした。

日本語学、日本語教育に関わっている人なら、寺村先生の名を知らない人はいないと思います。寺村先生が日本語教育者として、生きた言語と接しつつ築き上げた日本語像は、生命力を持って数多くの人を魅了しました。寺村先生の業績についてはここで言及する必要はないと思います。一時の流行に振り回されることのない、こつこつと積み上げられた先生の研究は、活字となって、同時代人そしてこれからの新しい研究者へのインスピレーションとなりつつけていくでしょう。

ここではむしろ、活字ではなく、人の心に記憶としてしか残ることがない先生の暖かい人柄に触れたいと思います。私が知っている寺村先生の大事な側面だと思います。

寺村先生のことを初めて知ったのは今から18年も前のことです。国費留学生として大阪外大の留学生別科にいたころ、となりのクラス担任の先生はとても人が良く、留学生の良き理解者であるという噂を聞きました。寺村先生のことでした。その後、「もぐり」で先生の大阪外大の講義に通ったのを初めに、70年代の後半から、修士課程、博士課程を通じて指導教官として先生と接しつつ、私自身もそれを実感してきました。先生の筑波大学の研究室、B612号室はいつも賑わっていました。論文、レポートの指導、留学生の生活問題、何気ないお喋り、先生はいつもそのための時間を作って下さっていたのです。また、毎年お正月の頃にはオープン・ハウスで多くの院生が先生のお宅に集まりました。ひょっとしたら、私の筑波大学の学生の頃からの一番印象に残った思い出は

先生のオープン・ハウスかもしれません。

講義の進め方もユニークでした。講義というより、むしろ一種のワークショップといったほうがいいでしょう。出来上がった知識をそのまま教えるのではなくて、ある問題について皆で一緒に考えてみようというアプローチでした。教えるというより、学生にも考えさせることが多かったと思います。

指導教官としても、既成事実をいつも見つけ直す反教条主義的な態度が見られたかと思います。ひとつの「教え」を押し付けることなく、たとえ既成の考えに反するものでも、言語事実に基づいた具体的な根拠のある、しかも筋が通っている発想・アプローチなら、それを受け入れたのです。迷いに迷って自分の道を探っていた私を、先生は辛抱強く見守って下さいました。私もきっと、このような指導教官でなければとくに挫折していたに違いありません。このように、寺村先生は狭い意味での「弟子」は作っていません。が、もっと広く、あらゆる権威を疑い、言語事実をいつも新鮮な目で見つめるという意味では、多くの人が先生に大いに学んだことではないかと思えます。

寺村先生は突然私の生活からいなくなることがよくありました。大阪外大から突然の筑波大学への転勤。後を追って筑波大学に入ったら、先生はオーストラリアへ招待され途中で半年いなくなりました。数年前過労で倒れて、数カ月も仕事を休まなければならぬことになりました。しかし、いつもいつも、先生がまた戻ってきたか、私が先生のところへいったかし、会うことができました。そして、これからも必ず会えると信じていました。今年の四月から筑波大学で仕事をするようになったので、これから数年の間は大阪まで行けばいつでも好きな時に先生に会えると軽く思ったのも不思議ではありません。

しかし、先生に直接教えていただいた他の多くの人たち、先生と一緒に仕事をした人たち、先生を尊敬した人達と共に、先生に会うことはもうありません。先生から学者として、人間として多くを教えていただいたことを感謝するとともに、先生のご冥福を祈っています。